

沖縄に試験地を設置し試験年数の短縮をはかる

農薬の変遷は意外にスピーディである。即ち一つの種類の農薬の寿命は、概して短い。それは、新しい良いものが年々才々出現して行くことが大きな原因かと思うが、特に後者については最近残留毒性、環境汚染の問題がやかましくなっており、作物栽培の面からみれば、すこぶる良い農薬であっても、こう言った衛生方面の観点から使用を規制されて行くことが、これに拍車をかけている。

ある目標に向って新農薬の開発を始めてある物質が創造され、これが作物栽培上の適用に関する各種の試験、毒性や残留毒性に関する試験等を経て農薬登録を受け、工場を設けて実際に工業生産、さらに販売、普及に移されるまでには、どのようにしても相当な日時を費やしてしまうことになる。この日時は、即ちその農薬の寿命の中に食い込んで行くことになるのであるから、この間の年月を少しでも短くしたいものである。これは単に農薬製造業者の利益という面ばかりでなく、よく効き、しかも毒性、残留性の少ない農薬であるとすれば、これを使用する作物栽培者、農産物を消費する人類にとって大きな福音であるに違いない。

作物栽培への適用試験は、小規模にはファイトトロンのようなものを利用して、1年数回これを行ない、試験期間の短縮ができるし、現在もこのような方法が一般にとられているが、何と言っても人工的にクローズされた空間の中で行なわれる試験で、野外ではこれとは異なった事態に遭遇することが稀ではない。従って、野外試験を数多く行なって、誤りないことを期すためには、年月にその解決を求めなければなら

目 次 (第7巻第7号)

東アフリカ農業の印象 2

農林省農林水産技術会議

浅 川 正 彦

日本の農業生産と生育調節剤の将来

1. はじめに 10

2. 生育調節剤の安全性 10

3. 省力技術と生育調節剤 11

4. 質的生产性と生育調節剤 12

5. 量的生産性と生育調節剤 13

6. これからの生育調節剤開発 13

農業技術研究所 太 田 保 夫

昭和47年度冬作(麦・いぐさ等)

除草剤試験成績概要 14

ない。しかし、考えてみると、南方熱帯亜熱帯には、温帯における作物生育期と気象条件においてかなりよく似た状態を、温帯の作物生育期でない時期、例えば冬の期間にこれを発見することができる。こう言った地帯を利用して、温帯で試験のできない時期に、なお試験を重ねることによって試験精度の向上をはかり、試験年月を短縮し得る場合があるに違いない。それは必ずしも温帯における作物栽培時期における試験と厳密に同一でないであろうが、少なくともこれから帰納して得られる結論は少なくないと考えられる。

以上のような考えから、当協会では沖縄県石垣島に試験地を設けて、この種の試験に取りかかることにしている。幸いに吾々の意のあるところを諒として、この挙に御協力御援助あらんことを望んでやまない。

(日本植物調節剤研究協会会長 河田 党)